慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「近代」づくりを地域の水脈に求めて： いくつかの福沢書簡を手がかりに
Sub Title	
Author	金原, 左門(Kinbara, Samon)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2003
Jtitle	近代日本研究 No.20 (2003.) ,p.43- 75
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	『福澤諭吉書簡集』完成記念講演録
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20030000-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第二十巻（二〇〇三年）

『福澤諭吉書簡集』完成記念講演録

「近代」づくりを地域の水脈に求めて

――いくつかの福沢書簡を手がかりに――

金原左門

はじめに

紹介をいただきました金原でございます。

あらかじめ奇妙なタイトルについて、ちょっと説明をしておかなければならないかなと思います。まず「近代づくり」ということですが、これは三〇年以上前ぐらいに、当時私がアメリカで習った「ネイション・ビルディング」nation building ということばを何となくイメージしています。その際の「ネイション・ビルディング」ということばなんですけれど、『福澤諭吉書簡集』（以下、『書簡集』）を見ていますと、なんかようやくその実態の核心が摑めたかなというふうに思っています。

福沢諭吉はその「ネイション・ビルディング」の基礎づくりにずいぶん関心を持っていたのではないかというふうに考えられます。と申しますのは、実は近代の国家建設については明治維新政府の中枢にいる大久保利通や、大隈重信らは太政官の中にあって、英国をモデルにすえて「ネイション・ビルディング」を模索していたんですが、福沢は英国の議会制を構想しながら大久保らとは明確に異なるところがあったのではないかと思います。

それはどういうことであるかといいますと、福沢の発想の根底には地域における民衆の、国民の社会生活の「シビック・カルチャー」civic culture をどうつくり出すかということを置いています。言い換えますと、福沢は、民衆の一人一人が公的な事柄と私的な経験というものを、どう分別しながら生活の中に裏付けしていくかということを、探し求めていたのではないかというふうに思います。

そこで問題は、その次の「地域の水脈」の「地域」ですが、「地域」というのは普通名詞ふうに使っていただいて結構だと思いますが、藩であったり、村であったり、あるいは武蔵国、相模国という古い国ですね、そういう地域を何となく想定していただければ結構だと思います。ただ、福沢の書簡を見ていきますと、ある場合には学校づくりにおいて非常に広い範囲を考えていたり、それから、経済的な事柄については、小さな単位ですね、旧自然村のような範囲を「地域」というふうに使っている場合もあります。そういうふうに伸び縮みする複合的な意味合いでの地域を考えていただければと思います。

それからもう一つ「水脈」という妙なことばを使いましたが、「水脈」はいったいどこにどういうような地下の流れがあるかわかりませんけれども、その筋道を発見し拾い上げていくことによって、福沢は、最後は「ネイション・ビルディング」に引っ掛けていく考え方を持っていたのではないか。その「水脈」を書簡の中

からずいぶん読み取ることができたような気もいたします。いずれにしても、そういうような意味合いでタイトルを構成してみたわけです。

ところで、レジュメの中で最初に掲げている「福沢とわたしとの奇妙な出会い――金泉楼・萬翠楼で」ですけれども、この点について少しお話しておいたほうがよろしいかと思います。

これは二、三回何となく綴ったことがあるのですけれど、実は一九六九年の非常に寒い二月頃だったのではないかと思いますが、福住正兄のお宅に史料調査にうかがったんです。福住家は、神奈川県足柄下郡箱根町の湯本にあります老舗の温泉旅館です。史料調査は、もう亡くなりました地租改正の研究で一家を成しておりました丹羽邦男さんと二人だったんですが、実は、神奈川県史の仕事で福住の家へ一度行かなければというふうに思いつつも、なかなか許可が出なかったんです。ようやく許可が出て、たしか津田文吾知事の紹介状と、それから願い状を持って福住正兄の家に調査にまいりました。

レジュメに「金泉楼・萬翠楼福住で」と書いてありますが、萬翠楼という名前は木戸孝允が命名した名前で、金泉楼とともに擬洋風建築です、金泉楼は明治十年につくられております。それから萬翠楼が明治十一年です。そのときは気がつかなかったんですが、福住正兄という人物はたいへん進取の気性に富んでいたので、逸早く横浜、それから東京と、大工を連れて洋風建築を見て歩いて、それらを模倣してつくり上げたのが現在も残っている金泉楼、萬翠楼であります。この建物については、最近、保存されている書画とともに、箱根町立郷土資料館編『国重要文化財指定記念　福住旅館金泉楼・萬翠楼』（郷土資料館）というすぐれた調査報告書が刊行されています。

福住家調査のもともとの狙いは正兄が二宮尊徳の高弟の一人ですから、どうしても「報徳主義の思想」とか、「報徳主義の仕法（経営）」を調べに行くことが主目的だったんです。丹羽さんが経済面で、私がその他雑把な調査項目を立てまして、まず文書史料を見ていったわけです。二日目だったと思いますが、福住正兄の残している文書の中に、『団団珍聞』をはじめとして、自由民権運動関係の新聞や、それから文書類、刊行本が出てきたのです。その中で、福沢諭吉の像が大きく浮かびあがってきたわけです。私は「報徳」と「民権」、そして福沢と、これこそ実に妙な組み合わせだなと受けとめ、そのときには私は、福住がたまたま義理とか人情にかられて、これらを購入したのか、あるいは積極的に買ってなんらかの魂胆をもって読み通したのか、そのいずれにしても二つのうち一つだなというふうな思いで帰ってきて、それきりになってしまったわけです。

しかし、その後、神奈川県史をやっているときに、私は柏木忠俊という人物に出会い、この柏木と福住とのつながりがわかってくるわけです。いずれ少し先でお話します。また、福沢の柏木宛書簡も『福澤諭吉全集』（以下、『全集』）、『書簡集』の中にいくつか出てくるのですが、その手紙を読んでおりまして、柏木の人間関係にほだされてどうしてもこれは一度調査に行かなければならないということで、静岡県の伊豆の韮山に出掛けていったと思います。二、三回まいりまして、柏木忠俊が容易ならぬ人物であることにだんだん気がついていったわけであります。

なぜ柏木かということになりますと、実は明治四年の十一月から明治九年の四月まで、皆さんご存じの小田原市に県庁が置かれ、足柄県という行政区域が四年とちょっとですが存在し、そのときの知事がこの柏木忠俊だったからです。しかも、柏木は開明的すぎました。どうも県知事については、われわれは何ていいますか、官というのは官尊民卑であるという考え方で凝り固まっておりますから、柏木の治績の数々を検討してあまり

にもデモクラチックでありすぎるのでびっくりしていたんです。

それもそのはずです。『書簡集』の第一巻の**六四**にあります明治二年三月八日付の、柏木摠蔵宛の福沢諭吉の手紙が一つのヒントになります。摠蔵は忠俊のことです。

方今之天下議事院なかるべからず。議事院を建んとするニハ、此珍書なかるべからず。此書を読む人ニして、始て共ニ天下之大政を論すべし。

この一節が生きてくるんですね。「此珍書」というのは、手紙の中に出てきて柏木に贈呈している『議事院談』という翻訳構成本で、正確には『英国議事院談』です。だんだんわかってきたことは、柏木が足柄県知事として、この『英国議事院談』をバイブルにして治政をひいていったということであります。

ちょうどその頃、神奈川県の知事はどういう人物がなっていたかというと、陸奥宗光、大江卓とか中島信行という人たちで、陸奥とか大江は中央の官に就くまでは、実に思いきったことをやっています。たとえば、キリスト教の禁制を解くとか、あるいは、マリア＝ルース号事件で清国からの奴隷を横浜港で解放するというようなことをやっているわけです。それと張り合う格好で柏木は、地域から民情を汲み上げていくことを政治の要にしていたわけであります。柏木は福沢の影響をじかに受けていたわけです。

そうすると柏木と福沢というのは、いったいどこで知りあったのか。長らく疑問だったのですが、そのヒントを与えてくださった方がきょういらっしゃいます竹田行之さんです。だいぶん前になりますが、竹田さんにその話をしましたら、「いや、長崎じゃないかな」なんていうお話がありまして、それで調べてみたらちょう

ど福沢諭吉が蘭学を学びに長崎に行っているときに、柏木も長崎にオランダの砲兵術とか何かというような事柄の教えを受けに短期留学で行っているわけです。それはだれに言われて行ったかというと、江川太郎左衛門（英竜）であります。

柏木には二つの短い伝記的なものがあります。『柏木忠俊小伝』と『柏木忠俊履歴』で、ちょっとわかりにくい内容ですが概略は摑めます。そこからいろいろ推し量っていきますと、柏木は十四歳にして江川太郎左衛門に見込まれまして、書生として登用されたわけです。柏木家は代々江川代官所の役人だったようです。江川英竜が柏木を可愛がったということは、彼に才能と人間味があったということです。たとえば、柏木は一八四〇年代から五〇年代のはじめにかけて、江戸幕府の海防係を命じられた江川の鞄持ちをやり、そして嘉永七（一八五四）年ですか、いま話したように柏木は江川の命令で長崎に遊学をしているわけであります。いまでも、実際に長崎に行ってみますと、狭い範囲の土地がらでありますから、いろいろな人が顔を合わさないことはないだろうと思います。おそらく砲兵術を学びに行っている柏木とすれば、同じ高島秋帆門下であります山本物次郎と、それから江川との関係で、江川からも福沢諭吉が留学している先の山本家のことは頭に入っていると思いますので、二人の出会いはたぶん間違いないだろうというふうに思います。

その柏木と福沢との関係をイメージに描いていくと、『書簡集』第一巻における福沢書簡をより深く読めるわけであります。

問題は次ですが、今度は福沢と福住との関係です。そこで『書簡集』第一巻の一六三を取り上げて見ましょう。これは、福沢諭吉が柏木忠俊に宛てた明治七年の書簡です。これには重要なことが秘められていると思います。一つは、柏木忠俊からの頂戴物に対するお礼なんですが、その追伸のところに出てきます「湯治中無為、

宿之主人湯本之九蔵（正兄　筆者注）へも相談、道普請之話しいたし居候」という一文です。福沢は柏木忠俊知事に、道づくりのことを手紙では読み切れないほど話していたのではないか。しかも、同じ話を正兄にも話していたということであります。と申しますのは、実は柏木忠俊はそのころ密かに福住正兄に対して箱根越えの道の拡張と開鑿についての設計と見積りを下命していました。このプランは箱根湯本側の三枚橋というところから旧東海道をたどり、畑宿を通って湖尻に出て、そして三島へ到達するというコースで練られていたようです。その車道の道路設計を福住正兄がやっていたという証しはあるのですが、ただ、その図面がいまだに出ていないだけです。ですから、明治七年三月という時点で福沢諭吉は柏木知事や福住正兄に対して、道路開鑿の話をしていたというふうに言えるわけです。

こんなことで、結局私は、ひとまず書簡を福沢、柏木、福住という三つのアングルから詰め、『書簡集』第一巻を読んでみたわけです。

福住正兄からちょっとご説明申し上げます。福住正兄については佐々井信太郎という二宮尊徳研究家が非常に短いのですが『福住正兄翁伝』を、大正十三年に書かれております。私はこの本には足りないことがいっぱいあるなと見ていますけれども、その限りにおいて読めば、優れた伝記になっているというふうに思います。その福住正兄は、実は二宮尊徳の四高弟の一人であります。四高弟というのはだれかといいますと、富田高慶、斎藤高行、それから『書簡集』第二巻の四三〇に出てくる岡田良一郎です。この書簡は、明治十三年ではないかと編者は推定していますが、一月二十五日付で福沢が浜野定四郎慶應義塾塾長、渡部久馬八同塾監のお二人に宛てた手紙の中に彼の名が出てきます。

遠州掛川在倉真村ニ、岡田良一郎ト申人物有之。

岡田良一郎の名が書簡の中にでてきたのは、実は岡田が開いた私塾冀北学舎に彼から英学教師の斡旋を頼まれた福沢が、浜野らに相談したといういきさつからです。この手紙は今回吟味しなおして重要な史料だと私はびっくりしたんですが、これで福沢と報徳との関係が、この一点の手紙によって重なり合う部分がより深くなりました。当時、岡田が民権運動にかかわっていたとはいえ、そこからまた報徳思想を福沢のレンズを通して読み変えなければいけないのではないかというふうに思います。

と同時にもう一つは、二宮尊徳から切り離して近代初期の報徳思想の持つ意味合いを、再検討しなければならないということが、この書簡からうかがわれるわけであります。

ちなみに良一郎の二人の息子の一人は岡田良平でありまして、現在でも静岡県の掛川市にあります大日本報徳社の、良一郎からすると三代目の社長で、文部大臣を経験します。もう一人は東京大学教授を兼ねた内務官僚で、文部大臣、内務大臣、宮内大臣を歴任した一木喜徳郎です。彼はまた、大日本帝国憲法の中の天皇の神権説に立ちながら機関説憲法学を唱えた人物で、美濃部達吉の国法学の先生でもありました。

そのほかの高弟で私は、『報徳記』を書いた富田高慶とか『報徳外記』の斎藤高行については、まだ勉強不足であまりよく知りません。そこで福住に焦点を絞りますと、福住は二宮尊徳の報徳思想の系譜、すなわち「分度」と「推譲」の仕法の骨組みを引きながら、しかも『二宮翁夜話』という伝記を書いているにも拘らず、福住と二宮尊徳との間には、時代の差があるなということを感じます。近代と前近代との違いということですか。実は報徳博物館の佐々井典比古さんという方がいらっしゃいます。この人は、信太郎の子息で神奈川

県福知事を歴任され、小田原市に建てられた報徳博物館の館長をずうっと長いことやられてきた方です。十年以上前になりますか、そのころ何回となくお会いして話をお聞きしたんですが、時折り私は、二宮尊徳より福住正兄のほうが一枚上ではないだろうかという問いかけを佐々井さんにしたことがあります。要するに尊徳はいわゆる土地領有制の時代に生きて「報徳仕法」をやった人物で、正兄は資本主義化の社会に生きた「報徳思想」だというふうに話をもちかけ、どうも正兄のほうが考え方が少し上ではないかということを言ったんです。

しかし、佐々井さんは頑として首を振らないんです、何回尋ねてもだめなんです。佐々井さんは二宮尊徳一点張りでありますから、当然のことながら私の見解など、歯牙にも掛けません。あるとき報徳博物館の学芸員と酒を飲んでるときに、彼は「いやあ先生、あんなにしつこく聞かれてもそれは無理ですよ、佐々井館長はちゃんと序列をつけ、四高弟の中で、福住正兄は三番目ですよ」と。驚きましたね。そこで私は「四番目はだれだ」と聞きましたら「岡田良一郎だ」と言うんです。トップは富田高慶で、だから富田、斎藤、福住、岡田という順番になるわけです。実践派としての岡田、福住に対する点数が辛いというのは共通しています。そこが富田と斎藤との分かれになるのかなというふうに考えました。

一　福沢の原体験のかけがえのない重み

ところで、私は福住正兄との奇妙な出会いを経て、報徳思想の意外性に関心を寄せて今日に至ったわけです。今回の『書簡集』を見ておりますと、先程もちょっと言い掛けましたように、福沢の考え方の地域へのこ

だわりと、報徳思想の柔軟な変わり方が手にとるようにわかり、両方から見ていく必要があるという確信を持つようになりました。そこで、福沢自身の原体験として、飯田泰三さんと松崎欣一さんのお二人の名で、第一巻目にいいヒントを与えている優れた「解題」を書かれております。『福翁自伝』に出てくる「門閥制度」の批判と、それからことばを借りたのですが、中津藩内での「福沢をめぐる人脈」へお二人が着目をされているということであります。

飯田・松崎氏の「解題」によれば、福沢の家は『福翁自伝』でいう孤立した生活をしていたというのとは異なり、中津藩士の間の密度の濃い姻戚関係と、野本真城の塾に集まった塾生、島津祐太郎とか奥平十学、桑名登、奥平伝四郎ら、若手改革派のグループを背景にした福沢の顔があったようです。そこに「福沢のもう一つの出発点」があったと「解題」は述べています。

また、「解題」は『書簡集』第一巻に収録されている手紙を見て、福沢と中津藩とのつながりは、明治維新後、あるいは廃藩置県後もきわめて密接であったと述べています。飯田さんと松崎さんは、その例証として中津市学校の設立や運営、中津の多くの事業に助言や助力を惜しまなかった福沢にふれ、さらに、藩主奥平家の東京移住や家計の管理について、あるいは若い藩主奥平昌邁の留学まで面倒をみた福沢の姿を描いています。そして、こう述べていました。「『私の為めに門閥制度は親の敵で御座る』と言ってのけた封建制批判のイデオローグ福沢という像からは、想像できないものがあった」と。

福沢は中津藩の人的なつながりにこだわりをもちながら、時代の転換に熱い眼差しを向けてもいました。事実、『書簡集』の第一巻目を見ますと、そのことが言えそうです。たとえば、福沢がイギリスに留学しているときに、当地から一通の書簡を送っております。六にある文久二（一八六二）年四月十一日付、中津藩士島津

祐太郎に送った封書です。その中で福沢は何を強調していたかというと、洋学の奨めと「富国強兵」です。「当面の急務は富国強兵だ」と言う福沢は、その根本は「人物を養育」することに専念すべきであると書いています。これは高杉晋作が上海に渡る前に、長崎で薩摩の交易を見て貿易の必要性と「富国強兵」を強調していましたが、それと同じことを福沢は指摘しているわけです。私どもは「富国強兵」ということを必ずしもプラス・イメージばかりで教わってきたわけではありません。むしろ近代の要として「富国強兵」を重視していることはものすごく重要で、リアリティーがあると思います。

そういうことを含めますと、飯田さん、松崎さんが「福沢をめぐる中津藩内の人脈」に着目していることは、実は福沢の明治維新後の中津藩に対するいろいろな梃入れと同時に、地域に対する福沢の見方というものを確定していったのではないかというふうに思います。その典型的なものは中津市学校の設立と、校長の小幡篤次郎と、短いですけれど『学問のすゝめ　初編』を著したことだと思います。この『初編』については福沢が末尾の「端書（はしがき）」でふれているように、中津市学校に学ぶ同郷の青年・友人たちに読ませるために綴ったものでしたが、これを見たある人の、この冊子は広く世間に広めたほうがよいという進言により、官許を得て増刷していったようです。この冊子は、富田正文著『考証　福澤諭吉　上』（岩波書店）をはじめ多くの論者が指摘していますように、封建的身分制度に対する痛烈な批判となっていますし、明治維新政府のとった廃藩置県や「文明改進」の諸政策を背景に、福沢が歯に衣を着せない意見を述べはじめた書であります。『学問のすゝめ　初編』は各地の藩校の流れを汲む学校で使用されていますし、多くの人が指摘していますように、当時の人心に相当なセンセーションをひきおこしたようでした。福沢自身も『初編』については気負い立っていたようです。『書簡集』第一巻の一九の九鬼隆義宛の手紙を見てもよくわかります。九鬼は旧三田藩主時代の慶応年

間に藩校で洋書を取り入れ、藩知事を歴任した人物です。ですから私が今回『書簡集』を読むにあたり、やっぱり福沢がいちばん目をつけていたのは「学校教育」で、とくに洋学の普及ということに熱を入れていたということが、よくわかる気がしてきたわけです。たとえば、いまあげました九鬼宛の書簡にも学問も追々流行するようになり、「漢書ハ殆ト廃止同様」になるとしたためた福沢は、三にあります庄内藩士出の高力衛門宛の手紙の中にも世の中もだんだんよい方に向かっていて、「横文」「原書」の必要を説いていました。九鬼への手紙は明治五年の二月十五日付で、高への書簡は三月二十三日付ですから、福沢の『初編』における心意気がひしひしと伝わってきます。

ところで、今回の『書簡集』では、福沢諭吉の実像がいままでぼやけていたり、あるいは見えなかったものが、確実にその輪郭が現れてきたところが多々あるということであります。たとえば、「人間」ということについて一つ焦点を絞りますと、面倒みのいいことはこれまで言われてきたのですが、面倒みがいいだけではなくて、福沢は人の嫌がる仕事を積極的にやっているということであります。たとえば明治十六年ですか、『書簡集』第四巻の八〇五に十二月一日付の伊東要蔵宛の手紙が新しく入っています。伊東要蔵という人、ひょっとしたら私が父親から昔話を聞いた、あの伊東さんかなと思って注を読んでみましたらまさにそのとおりだったんです。伊東要蔵という人物は、私の生まれ故郷のちょっと西、浜名湖の北側に三ケ日町の都築というところがありますが、そこの出の人で旧姓は山田といいます。その彼は浜松の瞬養学校（変則中学校）を出まして、それから暫くしてから寄寓していた浜松中学校の先生と共に慶應義塾に入塾しているんです。明治十二年でしたか。そして福沢諭吉の薫陶を受け、十四年春に卒業して義塾の教員兼塾監をやったようです。そして明治十六年二月に大阪府の商業講習所教員として赴任するときに、慶應義塾の出版局から金を七十円借りていくわけ

です。それで毎月分割返済するということになっていましたが、二回ばかり払ってその後送ってこないわけです。そこで福沢諭吉が借金催促の手紙を書き、それが載っているわけです。福沢はこのような厄介な金子返済の督促掛をやっていたわけです。

山田は翌年、中川村（現、細江町）の伊東家に養子に入ります。伊東要蔵の屋敷は、私の家から直線距離にして八〇〇メートルぐらいで、昔はその間に見渡すかぎり水田だけが広がっていて、静岡県引佐（いなさ）郡のあの付近では現在なお珍しく残っている旧家の一つであります。私の記憶に間違いがなければ、大正十三年時の農商務省の『全国五十町歩以上ノ大地主』の報告書があるのですが、静岡県の西でその中に唯一載っていたのが伊東要蔵の屋敷だけだったと思います。

少し余計なことをしゃべり恐縮ですが、福沢諭吉は借金催促までやっているわけです。義塾の経営に関わるとはいえ、福沢諭吉の持っている人間の幅の広さということが、どれほど計り知れないものであるかがわかります。

それともう一つ、福沢の社会的な活動力、実践力です。私は『書簡集』のいろんなところから拾ってみましたところ、このことを証明する手紙がごっそりあります。ここではとくに産業社会経済のことがらに限定しますが、たとえば、千葉県埴生郡長沼村の例を挙げておきます。これは『書簡集』第三巻の六五の長沼村民宛（明治十四年十一月三十日）の書簡です。ことは長沼という、三〇〇ヘクタールほどの沼地の漁業・採藻権ですね、それから渡船営業権に関する紛争がありました。この書簡で改めて見ていきますと、この沼は近世から長沼村一村の入会地でありましたが、周辺の村々から入会の希望が強く、福沢は、二十五年間にわたって長沼村に許可が出るまでこの面倒をみているんですね。この事件については、会場にいらっしゃっている西川俊作さ

んの「長沼の下げ戻し百年」（『福沢手帖』一〇一号）という精密な論文がありますのでそれにゆずりまして、私がびっくりするのは福沢の持続的な実践エネルギーです。福沢の長沼事件へのかかわりから、また、こんなことも言えるかと思います。私どもはいままで、たとえば教育の近代化、産業経済の近代化というふうに、事態をセパレートして見ていましたのですが、どうもそういう見方はあまりよくないのではないかと思うようになりました。実際の世の中では産業とか、政治とか、社会とか、いろんな事象が絡まっているのですが、そういう近代化を図るいちばんの要として福沢はやっぱり「教育」を考えていたというふうに読むべきではないか、と私は思います。

事実、長沼村民に宛てた手紙の中でも、福沢は村中一致して誠心誠意勉強するよう奨めていますし、そうすれば目的を達成することも夢ではないことを説いていました。しかも、福沢は、村の長老でもっとも勉強家である小川武平がこの問題の解決をはかり村のために専念できるように、民心の一致を求めていました。「民心一致」をはかることこそは、「智」が「近代化」の根底になり、洋学を主軸とする教育力が、福沢にとってみれば人材養成と「愚鈍澹泊」を一掃する鍵になっていたわけです。

福沢の教育実践に関するもう一つの手紙をとりあげておきます。順序が逆になりましたが、たとえば、『書簡集』の第一巻にあります一八六の小川武平宛の明治八年九月二十日の書簡です。小川は、いま話しましたように、長沼村のこの問題の代表で、第一巻の補注［こと］20の解説によりますと、村人の一人が『学問のすゝめ』の第七編だかを読んだのがきっかけで福沢を頼ることになったようです。明治七年の暮、小川ら村民から事件を知った福沢は、その窮状を知って同情し県庁との交渉に関していろいろ援助と指導を与えたようですが、手紙は県庁の係官と交渉する際に、やたらと福沢の名前を口に出さないように注意したものです。この紛争は一

村で権利等々をキープするか、他村まで許すかどうかということですから、どうしても県庁の裁量権にある程度下駄を委ねなければなりません。ところが長沼村の地元の人たちは、ことを有利に運ばせようとしてどうも福沢諭吉という人物を金科玉条のごとく利用して、県庁で盛んに福沢諭吉の話を持ち出し、「福沢諭吉に相談した」とか、「福沢諭吉がこういうふうに言った」とか、福沢という袖に隠れてものを言っていたということです。それを知った福沢は、小川武平に宛てて県庁の係官と交渉する際、あからさまに福沢の名前を使うな、それでは解決することも無駄になる恐れがあるということを言っているわけであります。それでは公私の区別がないことになると、福沢は教育しています。

福沢は、「公私の区別有之、公の場所には公の談判不致ては不相済」というふうに手紙の中で述べております。そして、さらに「私共は何程御叱りを蒙りマシテモ、県庁ヲバ親トモ君トモ思ヒ居リマスカラニハ、悪心は毛頭無御座、何分にも一時の心得違は御勘弁被成下、歎願の趣意は御聞届け被下度し。と、言葉を温和にしてピッタリ頼み、余念なく掛りの官員に依頼する方可然、何等の事あるも口上を間違へて官員の立腹せざる様致度候」と結んでいます。交渉術を教えてるわけです。「自分たちは無学だから」ということで、その辺について「誠に申し訳ないけども」という心得まで諭しているわけです。

こういう例はいろいろあります。たとえば『書簡集』第二巻の四三〇の番号が振ってあります愛知県春日井郡上条村（現、春日井市）の豪農林金兵衛宛の手紙です。明治十三年三月六日付の書簡です。これは有名な地租改正問題をめぐる春日井郡の一揆問題に絡むことなんですが、林は、郡長として郡内の西部に比べ東部がいちじるしく不利であると係官と折衝しましたが、妥協に達しませんでした。そこで郡長を辞任しまして春日井郡四十三か村の代表として明治十一年に上京し、ひょんなことから福沢の助力を得て地租改正事務局に出訴し嘆

願しましたが不成功に終わりました。地租改正事務局・県庁役人の官僚主義と激昂する農民の板挟みの中で、林は農民の暴挙を阻止したわけですが、福沢は林に東春日井郡長として村民をなだめるようすすめ、地価の改訂の見通しを述べたのがこの手紙です。ここにも福沢の経済がらみの知恵を強調したその必要性が現れているように思います。このように林金兵衛に対してとにかく春日井にかぎらず不公平な過重な地租にあえぐ村々は少なくなっていくのだから、心配するには及ばないというような解き方を諄々と述べているわけです。

二　「書簡」から見た福沢の地域へのこだわり

では、話を本題のほうに戻します。福沢が足柄県にかけた学校建設の問題は、成果を生んでいくことになります。この点については私は別のところで書いておりますので、二度繰り返す必要はないと思いますが、その後明らかになったことを一、二申し上げます。小田原藩では集成館という藩校がありまして、その集成館から近代になり廃藩置県に至るまで大久保氏という藩知事が治政を敷いていくわけですが、その間に、大久保氏は大きな改革をやっていくわけです。藩知事時代にすでに集成館をもととする文武館という学校をつくるのですが、その価値は、士族専有から農工商に至るまですべての子弟に文武館を開放したということ、それから、御国学（国学）、儒学に対して洋学というコースを設置したことです。そしてこれをもとにして、福沢は柏木に対して注進しています。それらの書簡がいろいろと出てきているわけです。

その藩校時代に堀源治（改名して後に省三）と小野太十郎という人物が、実はまだ慶應義塾になる前の福沢の家塾の時代に藩主大久保忠礼の命で留学しています。で、この堀源治と小野太十郎は一時文武館のあとの共

同学校（中学）で、洋学の教師をやっていくんですが、こういう教師をやとっていくその成果が、そこで使っているカリキュラムの中によく反映されていたわけです。そのカリキュラム（教科）の中に実は福沢諭吉が慶應義塾で使っている教科書を使ったり、あるいは慶應義塾で使わなくても、福沢諭吉の息がかかっているカリキュラム編成になっているということがはっきりしているわけです。そして、その教科書の中には『学問のすゝめ　初編』とか、『西洋事情』が使われていました。

それから、学校経営の問題でありますが、そもそもスタートを切った明治五年現在ですが、明治四年から明治五年現在で生徒の数はどのぐらいかというと、共同学校が六十五名です。それから小学校の日新館というのは約四百二十名。だからかなりの生徒数がいたということになります。そのあと柏木は、「山間僻地」ということばを使いますが、そこに至るまで学校を設立してまいります。そして日新館、共同学校の学校経営ですが、これは福住正兄も学校吟味係になります。学校吟味係は数年間行われましたが、この係は学校の維持、管理から、経営、運営に至るまで権限をもっていたわけです。問題はカネなんですが、もともと土台金は藩校時代からあるのですけれど、その上に利益を上げていくのは福住正兄の共同会社設立による梃入れですが、共同会社でカネを貸し付けて、そしてその貸し付けるカネの中から利益を多少上げて、そして経営を賄っていくというやり方をとっていました。

これは福住正兄が二宮尊徳と異なって、「結社方式」という報徳仕法を取り入れていくからです。それはどういうことであるかと簡単に言いますと、いちばんもとになる本社がありまして、その下に分社というのがいくつかあります。その分社の下にいくつかの支社をつくって、下からカネぐりを積み上げていくというやり方です。理論としては二宮尊徳の「積小為大」という、つまり小さいことを積み重ねていって大きなことを為す

という、その原理だろうと思いますが、こういうやり方をとっています。

それから次に重要なことは、福沢諭吉が熱を入れていたのは「道路の普請」問題であります。その道路の普請問題は、これは年号が入っておりませんけれども、明治六年の五月に出した「足柄新聞」（第六号）の「箱根道普請の相談」という福沢の文章に端的に現れておると思います。私は当初読み取ることができなかったのですけれど、『書簡集』が出ることによって実に単純なことに気がついたわけですが、これを読みますと、道路というのは経済の動脈であるということです。その経済の動脈を、やや普遍的なものにするために、福沢がそこで施していたことはやっぱり「教育」なんです。

「箱根道普請の相談」を見てみますと、たとえば、福沢は、塔之沢・湯本の湯場の人間を「ばか」「たわけ」「無学」「欲深さ」とこきおろし、罵詈雑言を浴びせていました。「湯場の人々無学のくせに眼前の欲ハ深く、下道の仮橋も去年の出水ニ流れしまゝに捨置き、わざわざ山路の坂を通行して、旅人の難渋ハ勿論」云々というところがあります。そして、「毎年三拾両の金ハしぶ〳〵出して一度に百両出すことを知らず」こういうところにも現れております。仮橋ではなくてちゃんとした橋をつければいいじゃないかと、提言しているわけです。福沢のこの発案は、仮橋では「湯場一様の損亡」にかかわり、「土地の繁昌」をはかるにはきちっとした動脈をつくりだし、商いの力をあげることにあったわけです。福沢は、悪口をたたいていたのではなく、世の中を良くしていくために啓発としての知識の必要性を説いていたわけです。

これは当時の地図を頭に描かないと読めないと思いますが、福沢自身も苦労して箱根の塔之沢に湯治に行っています。実は湯本という場所は、旧東海道を箱根山中から下って行きまして麓の方で須雲川に降り、そこを渡ったところにあります。で、塔之沢は湯本の北側のほうにありまして、早川という流れを一度渡ってもう一

度その流れを横切らなければならないわけです。その橋に仮橋があったわけです。で、出水すればすぐ流されてしまう。湯本と塔之沢の間に一つ湯坂道のある山が立ちはだかっています。それから北側のほうにいまの箱根登山鉄道が走っている山場の道があったわけです。この二つの山道があるんです。ところが、いまは湯本の駅の前から町中を通って塔之沢までは一直線で行けるわけですが、昔はなかなかそうはいかないわけであります。それで早川を渡り、道を通し、箱根越えをつくったらどうだろうかということで、福沢は提案をしたわけです。

それから、この『足柄新聞』を読むかぎり、福沢諭吉という人物は相当にすごいアイディアマンだと思うのですが、ここにもありますように「箱根山に人力車を通し、数年の後に八山を砕て鉄道をも造るの企をなさん」と書いています。おそらく箱根山にトンネルを掘って鉄道を通す発想は、福沢諭吉が最初ではないかと思います。実はその発想が何となく後になってしまうのですが、丹那トンネルができあがるのがなんと昭和九年で、箱根山というのはまさに「天下の険」であったわけであります。

ところで、道普請についての一文を、福沢は「東京牛込の富田氏」という人物に示し、賛同を得て富田と話して寄付を募り、話は鉄道敷設にまで発展します。

こういうことを見ると、くどくなりますが、福沢はなるほど産業、経済の近代化について考える際にも、「教育」がいつもその中に裏打ちされているということであります。

私がいま住んでいるところは、小田原市の東隣の二宮という町ですが、ここはピーナツ（落花生）でなぜか有名なんです。いまピーナツ畑というのは一枚もありませんけれども、まだ落花生屋が三軒ぐらい堂々と店を開いております。そこの落花生は国籍不明の落花生か、千葉県あたりから入ってくる物のようでありますが、

明治の初年のころですか、二宮でピーナツをつくりはじめ、当時は「立落花生」と言ったようですが、その事始めは福沢諭吉のアイディアだというふうに言われております。私の住まいの近くに昔豪農だといわれた二見という家がありますが、資料としてあるのは表彰状のような書付けだけなんですが、たしかに「福沢先生から立落花生」栽培の話があったそうです。それは、農作物の商品流通のために落花生を栽培したらどうかというアイディアだったそうであります。

それから小田原の国道一号線沿いの目抜き通りに中田屋という肉屋があります。すでに亡くなった相沢という人から聞いた話ですが、「あの中田屋は福沢諭吉先生が横浜から連れてきた肉屋である」と。もちろん現在の当主は三代目ぐらいですから知るはずはないのですが、そういうようなことが伝えられております。

足柄県の県庁の所在地小田原で福沢が学校教育に熱を入れ、「経済指南役」として経営についてのアドバイスをおこなっているなかで、知友の県知事柏木忠俊は福沢の『英国議事院談』をバイブルに開明的な施策をとり、県政治をやっていきました。その政治哲学は「民権の保全」という言葉で集約できますが、中身は何かというと、「民産の富殖」「安寧の保護」、それから「民智の開闡」です。柏木は、「上下情意」の融通をはかる必要にかられ、県行政と地域のさまざまな人たちの利害を媒介し、調整する役割の重要性を意識していたようです。ですから、民衆の世界に文明開化の輪を広げるために、先程も少しふれたように福沢の助言もあり、柏木は学校教育に力を入れていきますが、同時に民衆の生活水準をたかめ、旧相模国と旧伊豆国の風俗・習慣や風土の違いを乗り越えて、県の民力をどう強めていくか腐心していました。柏木が「分権」主義をとり、なによりも「公同資益」を優先させ、民衆の情を政治の場に汲み上げていくことをよくやっていきます。そして若干の会議録はありますけれども、「大区、小区制」の、とくに小区制の正副戸長の意見を聞き入れていくわけで

す。それで大区会議、小区会議の役割を重視し、代議人―区会の機能を大切にしていました。その意味で代議制は生きており、まさに『議事院談』のイメージがここにあったわけです。その頃地方長官会議が東京で開かれたときに、柏木忠俊は「足柄県の民情を自分はよく理解できないから」というわけで、大区、小区の代表を東京に連れて行っています。そういう実験もやっております。

その中で私がこの『書簡集』を手にとるまでうっかりしていたことは、『足柄新聞』の発行の意義です。これは『書簡集』第三巻にある大隈重信宛の明治十四年十月一日付の**K10**の手紙を見てあらためて気がついたんです。その中で福沢は、世の中の民権論は「全ク顚覆論ニ性質を改メたるが如し」と書き、「官民益反離」していくことを憂えていました。そして、ちょっとうしろのところで、「新聞紙発行ト地方へ人員派出ハ必要之事ニ而」というふうにあります。また、その少し前に、「昨冬来御内話、彼ノ新聞紙之事」云々と述べています。この「新聞紙之事」というのは注を見ていただければおわかりになりますが、「政府公報のこと」となっています。もっとも、『足柄新聞』発行準備のころの明治五年ごろと明治十四年とでは時間差問題があるだけでなく、政治状況も大きく変化していますから、そう単純にアナロジーするわけにはいきませんが、福沢の場合、公的メディアの重大さには関心があったはずです。私は大隈宛福沢書簡からヒントを得まして、『足柄新聞』がどういうのか漠然と考えていたことがよくわかるようになりました。福沢は政府とのそりが合わなくて「政府公報」にかかわらなかったようですが、『足柄新聞』は明らかに足柄県の「公報」であると思います。その発想は福沢か柏木かよくわかりませんが、編集をしたのは柏木とか福住という人たちからもう一歩世代が下がり、福沢諭吉を信奉しておりました中村舜次郎という人物であります。彼が編集責任者です。この新聞を、足柄県の「政府公報」というふうに置き換えますと、まさに県の新聞として、「官」と「民」を結ぶメディア

の役割を果たしています。現在、この新聞は何号か残っているのですが、いつ途絶えたかということもよくわかりません。月に大体一回出ていたようです。どうもそういう推定ができます。

いま、「政府公報」としての県のメディアの役割を担っていると話しましたが、この新聞の特徴は、つまり太政官、すなわち中央政府が決めた事柄を全部この新聞を介して民衆に伝達しています。たとえば第一号には、「太陽暦」を採用するときについて、細かく「太陽暦」のことについて触れているわけです。あるいは、県政上のことについても細かく触れています。それと、「右投書」というように投書欄を設けて、民衆の声を新聞に反映し、「下情上達」の道を設けているのも大きな特徴です。それからもう一つは、福沢諭吉のような文章が載る、こういうような性格のものであります。

ところで、中村舜次郎という人物について以前調べたところによりますと、彼はその後、近くの足柄上と足柄下の郡長を長いことやっていますが、その郡長時代のいくつかの治績を見ておりますと、どうも福沢の薫陶が明治二十年代のはじめまで生きている、というふうに読み取ることができます。そういうことを考えますと、中村は福沢諭吉のビリーバーの一人だというふうに思います。

話を元に戻します。『足柄新聞』は足柄県の「政府公報」としての役割を果たし、公論を生かすメディアであったというふうに読むことができます。

こういうことを考えてきますと、福沢諭吉がいろいろアイディアを、柏木忠俊に提出していたことは、意外に多かったのではないかと類推できるわけです。と申しますのは、もう一度**二六三**の明治七年三月二十日付、柏木宛の手紙のいちばん最初のところをちょっと見てほしいと思います。これはいままで簡単に上から下へ読んでいたのですが、途中から気がついたのですが、この中で引っ掛かることばがあるのです。それは何かと言い

ますと、「先日も途中失敬仕候」と、こういうふうになっておるのです。で、『全集』の「年譜」から、足柄関係だけを引っ張り出してみたのですが、明治七年の三月のところを見ると、三月十五日に「箱根入湯のため出発、母をはじめとし自家、中上川、服部等の家族同勢三十人」、すごい数だと思いますが、三月十八日に塔之沢に到着しております。そして二十日の手紙の件ですが、その前前日でしょうか「先日」というのは。その日、福沢は県庁に柏木忠俊を訪ねていたということに読めそうです。いま、この話を持ち出したのは、ほかでもありません。福沢と柏木の接見の一齣を披露したいのと、もう一つ福沢が東京から塔之沢まで当時どういうふうにして行ったであろうかと、その問題をこのあたりで紹介しておこうと思うからです。後者から申し上げますと、いくつかのルートが考えられるのです。このときは、十五日に東京を出発し、十八日に塔之沢に到着しておりますから、十五、十六、十七、十八日と、四日間です。女、子ども連れでありますからそのぐらいかかるのですが、私の類推ですと、海路とそれから陸路、両方を併用していたのではないかと思います。「海の道」というのはよくわかりませんけれども、横浜まで鉄路、そこから船で終着は小田原の御幸の浜というところ、ここは遠浅なんですけれど着けると思います。当時幕末、明治初年の船で小田原で持っていた船で大きいのは、つい数年前に、ある書付けの切れ端からわかったのですが、大体三百石船は航行自由です。その隣の私の住んでいる二宮の港は二百石船しか入りません。それから東へ行きますと、いまの藤沢、茅ケ崎あたりになりましょうか。それから三崎を回って江戸湾（東京湾）へ入ってくるということです。このルートを使うと手軽に箱根までは行ける。むしろ小田原から塔之沢に着くまでがたいへんだということです。

そういうふうに読んでみますと、福沢が「途中失敬仕候」というのは、これだけの人数ですからお家事情があったんだろうと思いますが、小田原の海岸で上陸してまっすぐ行きますと足柄県庁の所在地に出ます。その

途中にいまの国道一号線、つまり東海道があり、小田原の宿があるわけです。その宿の箱根口あたりを突っ切って県庁までが大体四〇〇メートルから五〇〇メートルぐらいです。柏木忠俊は持病の喘息持ちでして、普通の人間と同じように歩くのが困難であったらしく、県庁から外に出て福沢と面会しなかったようです。だから福沢諭吉は県庁まで出向いて会談することが多かったのではないかというふうに思っております。二人の接見のしかたです。

そこで『書簡集』の最初のところに書かれておりますように、『英国議事院談』から始まり、『世界国尽』が柏木の思想と行動に影響を与えたと、ズバリと的確にコメントされておりますが、それ以上に柏木は、福沢から直接にいろいろアイディアをもらっていて、福沢の支えで旧相模国の県民の信望をえていました。

足柄県が明治九年の四月半ばに廃止になり、一つの県を構成していた二つの国のうちの一つ旧相模国が神奈川県へ、それから旧伊豆国が静岡県へと分属することになっていくわけですが、柏木忠俊が県知事の座を降りて韮山に帰っていく際に、小田原の小学生の惜別の手紙というのが、彼の家に残されています。それを見ますと、いかに「教育」に熱心で治世の効果をあげていたかということがよくわかるわけであります。

三　地域の近代を担う日本型「ミッズルカラッス」に目をつけた福沢

そこで、その後のことでございますが、『全集』第十九巻の中にある明治十年以降の「知友名簿」、これを見てはっきりするんですが、福沢諭吉が旧足柄県に対して親近感を持つのは、一つは箱根の風呂ということがあります。もう一つは、この手紙をまとめて読み返して非常におもしろかったのですが、福沢が「国会開設建言

書」（「国会開設ノ儀ニ付建言」）をなぜ書いたかということがよくわかったわけです。その事情がいままで以上にはっきりしたということは、福沢諭吉がこの「国会開設建言書」を書いたことは「自分の快挙であった」というふうに手紙から読み取れるからです。どういうことであるかといいますと、**四八〇**と**四八一**の書簡を見ていただくとわかります。いずれも、明治十三年六月十八日付の手紙で、前者は江口高寛宛、後の方は酒井良明に宛てたものです。『書簡集』の第二巻に載っています。江口は肥後の国の士族で慶應義塾を卒業した人物で、酒井は三重中学校の校長です。

まず江口高寛宛の手紙ですが、その中で福沢は、

相模国九郡ゟ国会開設之建白、三百人斗之連署、本月初旬書面を奉呈いたし候。其周旋ハ専ら松本福昌なり。相州之建白者ニも最も富豪之者多し、他ニ異なる所なり。

ということを書いています。問題は、斡旋者の松本福昌で、小田原藩の番帳外の下士の出で慶應義塾を卒業し、このころ横浜方面で実業に就いていたようですが、私にはよくわからない人物です。ただ福沢のもとによく出入りしていたようです。『全集』第二十一巻あたりをみますと、福沢と松本との間での金銭の貸借関係の記載があります。なんでも福沢が箱根に湯治に現れたときには、よく使い走りをしていたようです。

それから**四八一**です。

相州九郡より国会開設の建白、本月初旬書面を奉呈せり。其周旋は専ら松本福昌にて、岡本杯も内々加勢

なり。松本は右に付近日誠に大モテにて好男児に相成候。

というふうになっております。なお、この文面に出てくる「岡本杯」云々というのは、岡本貞烋のことであります。岡本は、小田原藩の公費生として明治三年に慶應義塾に入った人物で、このころには交詢社の事務局の中心になっていました。福沢の信任も厚く、手紙に「内々加勢」とありますのは、この国会開設請願の署名者数は、相模国の九つの郡内の町村五百五十九町で二万三千五百五十五名にのぼっていますから、岡本らは運動を陰で支えていたのかも知れません。福沢は、どうやらそのことを述べていたようです。

ところで、ちょっと「年譜」を見ていただきたいのですが、「年譜」では明治十三年六月七日のところに「国会開設の儀に付建言」神奈川県下九郡の人民代表松本福昌の依頼により元老院に提出する建白書を代筆する」というふうになっておりますが、一回目の六月七日には「神奈川県下七郡の人民代表」の名で出すのですが、津久井、足柄上の山深い二つの郡の代表が遅れて東京に到着しまして、改めて八日に出し直して九郡というふうになるのです。ご承知おきください。そして十三人の代表が名前を連ねておりますが、ほとんど相模国の豪農、豪商なんです。福沢諭吉は先程の書簡の中で「富豪之者多し、他ニ異なる所なり」と書いていたのはそこなんです。福沢の「知友名簿」の中にも何人かが出てまいります。これらの人たちは大体交詢社に入るのです。

その一人、今福元穎という人物は、いまの小田急線の沿線の海老名というところに家がありました。この今福元穎というのは明治十一年に県会議員をやります。そして明治十四年、県会議員を兼ねながら高座郡の郡長をやります。明治十三年の「国会開設建言書」を出すときには県会議長をやっております。現在もお宅がある

のですけれども（もっとも関東大震災で丸潰れになりました）、元のまま復元しまして相当大きな屋敷であることが、その建物からわかります。

この今福は福沢諭吉の信奉者でした。そして高座郡というところは明治十四年以降、とくに彼の郡長時代、郡内の村々の農民たちはたいへん大きな負債に苦しみます。農民たちは、「借金党」とか「困民党」という名前で徒党を組んで、借金返済の棒引きだとか、返済の引き延ばしというような要求を掲げ、実際に実力行使をして、銀行や質屋等々を破壊するというような動きをとろうとするなかで、今福は最後の最後まで中に入って、債権者と債務者の代表との間で調停をします。この調停は見事に功を奏するのですが、その調停の仕方を見ていると、やっぱり福沢諭吉の教えを地でいっております。

それからもう一人、自由党の党員ですが、すぐ近くの下鶴間村（現、大和市）というところに長谷川彦八という人物がおりました。彦八は襲名で、十代目です。当時十代の後半ですが、家督を相続しておりまして、その当時「家譜」で見ますと四十町歩ぐらいの田畑を持っています。山林はわかりません。要するに豪農です。そういう人物が自由党員でありながら、反面、下鶴間外三ヵ村の戸長として、彦八はやはり今福と同じように調停に乗り出しております。

そして最近知ったのですが、十代目彦八の時代に購入した本が二百六十冊ぐらい残っているのです。一つは、実務的な書物、たとえば、常に土地問題などをめぐり係争が絶えませんでしたので、明治六、七年ぐらいに刊行された法令書のような太政官時代の訴訟のような実務書です。読んでいてなかなかおもしろいと思いました。それからもう一つは、ヘンリー・T・バックルの英国文明史など、要するに教養書なんです。その教養書の中に明治十四年刊の福沢諭吉の『時事小言』がありました。この『時事小言』は、よく知られていますよ

うに、『国会論』後編のつもりでまとめようとしたものですが、この本は、福沢が国会開設後の時勢に対する「官」「民」の心構えを論じたものとなっています。福沢がたいへんな気構えと自信をもってこの本を世に送り出そうとしたことは、『書簡集』第三巻の五九の松本直己宛書簡（明治十四年八月九日付）から六〇にある大隈重信へのやや長い手紙（明治十四年十月一日付）に至るこの間の十四名に対する書簡の端々からうかがうことができます。とくに東北行幸について行かれた大隈に製本五冊を使いの者を出して届けさせ、大隈に分与を依頼していること、この書に「小窓揮汗稿初成　十万言中無限情……」という漢詩を付し書簡にしたためていることを考えあわせますと、福沢の意気込みが手にとるようにわかる気がします。明治十四年秋に発刊された本で、いわゆる原典です。福沢諭吉の『時事小言』と、それからもう一つ目につくのはサミュエル・スマイルズの『セルフ・ヘルプ』の翻訳『西国立志編』を持っていたことです。十代目彦八は、書物に書き入れや傍線を付すということはやらなかったようですのでわかりかねますが、おそらく読んでいたと思います。ここが特徴的であると思います。

足柄県での福沢諭吉が言う「富豪之者多し」という角度から見ていきますと、自由党も改進党も差がないというふうにならざるを得ないわけであります。そういうふうに見たほうがよろしいかと思います。ですから明治十四年に板垣の一行が東北から新潟方面に遊説をするのですが、福沢が愛してやまなかった馬場辰猪がいるということは、不思議でもなんでもないような気がしてくるわけであります。

たとえば、明治十五年以降になって、この旧相模国で福沢の信奉者で交詢社に入った山口左七郎を社長とする湘南社という自由党系の政社ができます。発会式には自由党の副総理の中島信行も出ていますが、その要綱とか、社の取り決めであるとか、あるいは社の仕事の問題とかを見ていきますと、私はやっぱり交詢社の色彩

が強いということを感じます。

私はこのような社会関係の中に、日本の近代を推進する福沢流の「ミッズルカラッス」、すなわち中産者的生産者層を見出すことができるのではないかと思うのですが、これはちょっと言いすぎになりますでしょうか。この推進者層のものの考え方の根底にあるのは、どうやら明治版「報徳思想」ではないかと私は思わざるを得ないのです。その要に座っている考え方が福住正兄でありまして、たとえば、先程名前をあげました中村舜次郎も、それから三田の演説館にまで福沢諭吉を訪ね、明治十三年に交詢社に入った山口左七郎という人物もそうであります。山口は先程ふれましたように自由党系の湘南社の社長になるのですが、福沢をもう下にも置かないほどだったようです。その惚れ込みようというのは、たとえば、『西洋事情』の初編や外編をくりかえし読み返しています。左七郎は山口家に養子に入って昼間は地租改正事業に着手し、さらに郡長をやっておりますから、昼は働き、夜薄暗い行灯の下でそれを読んでいたと、『日記』の中に出てきます。こういう人物が浮かび上がってきます。その人物像というのは、農業経営に足をすえ、生産力をあげていくうえで過去に築き上げてきた現実を重視し、その考え方を土台として「近代」の実現をかちとっていこうとする構図の上につくられていたと思います。

となると、要するにイギリス型ではない日本型の「ミッズルカラッス」の根底にある伝統的な考え方というのは報徳主義に求めることができます。ですから、その際の報徳思想は、二宮尊徳の伝統的な「分度」と「推譲」の仕法を時代の変化をにらみながら塗りかえ、新しい衣をまとって近代化の実践の糧にすえていくことにほかなりません。だから報徳と福沢の思想がどこかで重なり合うということは、両方からの撹拌作用というのがあって、可能になるのではないだろうかというふうに思います。いまふれた二宮尊徳の仕法の要になってい

るのは「分度」と「推譲」です。「分度」と「推譲」があってはじめて、報徳という意味が出てくるわけですが、これを新しく読み替えてみる必要があるだろうというふうに思っています。

極端にいいますと、「分度」と「推譲」をイギリスのアダム・スミスの経済的な考え方に引き付けて見ていったらどうだろうかということです。「分度」というのは、少し説明しますと、これは生活の合理化と厳しい倹約で、あくまで私的な内側の問題ということになります。つまり個人の家計に当てはめて考えてみることが重要で、二宮尊徳もそう言っているわけです。たとえば、十両借金している者は十両借金したなりの生活をし、カネが余っている者は余ったなりの生活も可能になります。要するに、私的生活の中での合理化です。ただ、そこにエコノミーが入ってくるわけです、節約、倹約が入ってくる。その上に立って計画を立てるということになります。「推譲」というのは、「分度」でひねり出して余ったものを社会的な源資として支出するわけで、「推譲」は拠出することだというふうに思います。それは何のために拠出するかというと、ものをより多くつくっていく拡大再生産のために支出していく。それは強いて言えばより平等な次元を求めて、貧困からの解放に向けていくことにつながっていきます。こういうふうに社会に富を還元するのが「推譲」であるというふうにもっていったら、そこから、アダム・スミス流の「利己」と「利他」、「禁欲」と「営利」の関係に厳しい目を配り、損得の考え方を資本主義経済制度の中で考えていきますと、たとえば、一身から一家へ、一家から一村へ、それから一村から一つの領内につながり、だから一身の独立から一国の独立へという道程を併せ考えてみることができるということです。

そんなふうに見てきますと、どうもこの福住流の、前に説明しました「結社方式」仕法による「分度」と「推譲」を重視すると、その軸にあたる「朋友相結」は、仲間を結ぶことになり、まさにスミスのいう「フェ

ロー・フィーリング」と二重写しになるわけです。福沢はその計算可能な農業生産者層に近代日本の「ミッズルカラッス」の実像を見出していたと思います。また、福沢は旧士族の開明派リーダーの育成とともに豪商にも目を向けていました。豪商のケースに目をやりますと、「国会開設建言書」の総代の一人に杉山泰助という人物がありますが、彼は馬入川のほとり（現、平塚市）で薬種問屋を営んでいたんです。幕末に泰助は、大坂の緒方洪庵の適塾に留学をして、そこで蘭学を学んで帰って来ているわけです。そういう人間が含まれていますから、福沢諭吉は目を細めるわけです。こういうふうに見てきますと、私は地域の近代化を担う日本型「ミッズルカラッス」に福沢は目をつけていた、ということができると思っているわけです。

四　「独立自尊」の道を地で示した福沢の営為――しめくくりとして

もう時間がありませんので、しめくくりに持っていかなければなりません。私は福沢諭吉という人物は、足柄県で見聞きしていきますと、晩年に至るまで、私たちの想像をはるかに超えて西相模というこの地に出入りしていたようです。といいますのは、小田原市の北に南足柄市というところがありますが、福沢諭吉はしげしげと足を運んでおります。明治二十二年から以降は東海道鉄道（現、御殿場線）が、現在小田原市になっています国府津から松田、山北方面に走り御殿場、沼津に通じましたので、南足柄方面に入りやすくなったわけです。

ここで私が最後に言いたいことは、足柄県での実験を通じて、福沢諭吉のものの考え方の一貫性が出ていたのではないかと思います。といいますのは、実は私は、きょう話をするのは断念いたしましたが、いちばん最

後にあげております大隈宛の手紙とそれから**六六**の井上馨・伊藤博文宛の長い手紙（明治十四年十月十四日付）があります。その書簡を読んでおりましていろんなことが解釈できそうですけれども、たとえば、『英国議事院談』から始まって、「独立自尊」の最後の最後に至るまでの道筋というのは、一本の太い実線で描けるのではないかということです。たとえば、『書簡集』第一巻の「解題」の中でふれております遠山茂樹さんの『福沢諭吉―思想と政治との関連―』（東京大学出版会）の考え方などと、やっぱり違う見方ができそうな気がしているのですが、これはこれからの課題になってこようかと思います。

また、この点も説明できなくなってしまったのですけれども、私はその間にあって、「官民調和論」とそれから「治権としての分権論」とを置いて考えていく必要があるだろうと思っています。つまり簡単に言ってしまえば、日本のように後発型の近代をつくりだしていくそのコースの描きかたのハンドルさばきを、福沢は「民」の底力と「官」の支えというバランスを持った分業体制で「地域」という場からつくり上げていく方向を見出していたのではないかと考えています。そのことが、繰り返すことになりますけれど、『英国議事院談』から始まって「独立自尊」というところに結びついていく、一つの構図になるのだろうと、こういうふうに見ているわけです。

『書簡集』によってもっともっと読み下すことができる事柄がいっぱいありそうな気がしております。たとえば、「民権をけなし国権が重要である」と言っているときでも、「民権」か「国権」かということより、あるいは「民権あって国権」ということではなくて、「国権の中に実は民権が含まれている」というような読み方も可能だと思いますし、そういう意味ではいろんな読み方ができて、福沢像というのは、この『書簡集』によって検討を重ねていきますと、もっと膨らみを増すのではないかと、そんなふうに思っております。

少し時間が長くなってしまいましたが、この辺で一応閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。

（きんばら　さもん　　中央大学名誉教授）